

# 大阪大学言語文化学会 第 55 回大会

## 研究発表要旨

2019 年 6 月 27 日（木） 大阪大学箕面キャンパス

### 第 1 会場（E101 教室）

15:35-16:05

「嘘」と「冗談」～日本語と英語における  
 <真ではない発話>の捉え方の違い～

坂場 大道（言文 D1）

本研究では、先行研究で指摘される英語の lie と joke の区別が、日本語の「嘘」と「冗談」の区別とは異なる可能性を、コーパスにおける英語 lie と日本語「嘘」の語の用いられ方の違いから明らかにする。特に、英語では lie ではなく joke を用いる文脈でも、日本語では「冗談」と「嘘」がともに用いられることから、「嘘」と「冗談」には共通点がより多いことを示す。

吉村(1995)などの日本語の「嘘」の先行研究では、「嘘」と「冗談」の類似性を指摘しているが、両者を区別する条件には言及していない。他方、Dynel (2018)は、英語の lie と joke がともに<真ではない発話>に基づくものの、前者が否定的評価に値し、後者はそうではないことから、それらを明確に区別する必要性を主張する。Dynel によると、joke では、<真ではない発話>を述べた話し手が、聞き手にすぐに自ら真ではないことを明らかにする必要がある。なぜなら、命題が偽であることがすぐにわかった場合は聞き手に悪影響は及ばず、否定的評価に値しないからである。

上記の lie と joke の区別は、<真ではない発話>の捉え方の違いを示すことから、その捉え方の違いは、実際の言語使用にも反映されると考えられる。コーパス調査によると、直前に意図的に述べた<真ではない発話>の命題が真ではないことを、自身で明らかにした場合、(1)のように英語では joke が用いられる一方、(2)のように日本語では「嘘」も使用可能である。

(1) Josie: Warren gave me a baby.

Alice: Warren gave you a baby?

Josie: No, I'm just joking for the tape. (BNC)

(2) 「先生が好きなんだよ。なーんちゃって、嘘だよ」 (BCCWJ)

また、エイプリルフールに楽しまれる<真ではない発話>も、日本語では「嘘」と呼ばれるが、英語では lie ではなく、joke を表す語が、コーパスおよび辞書で用いられる。

最終的に、日本語における「嘘」と「冗談」の高い類似性は、「嘘」をつく行為が lie ほど非難に値しないことを示し、Everett (2011)が主張する「‘Lying’ は避けるべき行為」と

いう価値観の文化的普遍性に再検討を迫る可能性があることを主張する。

### 16:10-16:40

空間的な関係を表す「うえ」の接続表現化-関連性を中心に-

張 希西 (文研 D3)

本発表は現代日本語における「うえ」を取り上げ、空間的な意味を表す場合とその意味用法が広がり、接続表現のように機能する場合との間にどのような関連性があるか、その関連性を検討する鍵となるのが何であるか、などについて記述し、考察する。

空間的な意味を表す「うえ」は多様な格助詞と共起し、具体的な位置、方向などを表すが、前接する表現によって、抽象的な社会属性や年齢、「ある側面」「～という方面」のような意味を表す場合がある。また、「で」「に」などとひとまとまりになり、従属節と主節を関連づけ、事態間の論理的关系を表す場合がある。このような意味と用法の広がりから「うえ」の意味の「漂白化」、格支配などと関わる名詞の性格が薄くなる「脱範疇化」など、文法化に関連する現象が見られる。三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化：内容語と機能語の連続性をめぐって」は共時的な研究における文法化研究の意義を提示し、その意義は、①同一の形式における内容語的な用法と機能語的な用法との連続性、及び両者の有機的な関連性を捉えることが可能になること、②文法化後の機能語としての意味・文法機能を説明する際に、文法化前の内容語としての意味からの類推が可能になること、の2点(ただし②は①の帰結)に求められることを主張した。これにより、共時的な視点からも、「うえ」の内容語と機能語の間にも連続性が確認できると考えられる。

空間的な意味を表すとき、「うえ」は単独で使用される場合、一つの事物を表す表現と共起し述語の対象あるいは主語になる場合と、二つ以上の事物を表す表現と共起し事物と事物の間にある相対的な位置関係などを表す場合がある。これに対し、接続表現のように機能するとき、「うえ」は従属節と主節で表す事態間の関係を表す。本発表は、事物間の空間的な関係を表す「うえ」から、事態間の論理的关系を表す「うえ」への広がりにおいて、その間にある関連性を検討する「鍵」となるのは「関係」を表すことであると考え、この点を、「うえ」とこれによって関連づける事物、事態との組合せの様々なあり方から検討し、明示する。

### 16:45-17:15

英語の強勢移動(stress shift)におけるピッチアクセント削除について

田中 瑤子 (言文 D3)

英語において、japaNESE vs. JAPANESE REStaurantのような強勢の交替は、stress shift (強勢移動) または rhythm rule (リズム規則)と呼ばれている。stress shift を引き起こす要因はいくつかの観点によってなされているが、代表的な考え方は、rhythm rule や prosodic phonology (Hayes 1984 等)を含め、それが「実際に stress が移動している」とする説と、それとは別に「accented syllable の隣接に伴い、第一強勢の pitch accent が削除されることで、相対的に

stress が移動したように見える」(Vogel et al. 1995 等)という説の二つである。この両者の違いは主に、強勢移動を stress という観点からとらえるか、もしくは pitch accent という観点からとらえるかの違いとも言える。そこで本研究では、stress shift が「pitch accent 削除」によって説明できるという考え方を導入し、*Longman Pronunciation Dictionary* (LPD)において、stress shift を起こしやすいとされている単語とそうでない複数の単語について、英語母語話者三名に対して産出実験を行い、物理的高さである基本周波数 F0 の分析を行った。調査語の後続語には、accented syllable が隣接する場合としない場合とを比較するため、第一音節に第一強勢が来る単語と、第二音節に第一強勢が来る単語の二種を用意した。結果として、LPD で stress shift を起こす可能性があるとして記されている Chinese や compact といった単語の場合、そういった表記のない単語(austere や complete, また mature 等)と比べて、いずれの話者においても第一強勢の卓越が通常よりも弱まり、第二強勢とほぼ同程度、もしくはそれ以下の F0 を取る傾向にあるということがわかった。またこの傾向は accented syllable の隣接の有無にかかわらず観察された。一方で、強勢移動の起こりにくい単語については、citation form (語レベルにおける強勢型)を保つ傾向にあった。以上の結果は、stress shift が第一強勢の「pitch accent 削除」によって説明できることを支持する結果であるが、必ずしも「accented syllable の隣接」がその条件ではないということを示唆している。

\*\*\*\*\*

## 第 2 会場 (E102 教室)

16:10-16:40

外国人高度人材受入れ政策に関する批判的談話研究  
-内閣官房の公文書を中心に-

沈 吉穎 (言文 D1)

「The global competition for talent」(OECD, 2008) と呼ばれる時代において、世界中の多くの国が高度人材を獲得することにしのぎを削っている。日本においても、2008 年より開催された高度人材受入推進会議は、高度人材の受入れ促進が国の成長戦略の重要な一翼として位置づけられるべきとしている。高度人材受入れの促進に向けて、「本格的」に取り組み始めて約十年が経ったが、成果を収めた一方で、五十嵐 (2013)、加藤 (2016) などは、「高度人材」という表現によって喚起されるトップエリートイメージと、実際に受け入れた人々との間に、顕著な差があることを指摘している。

本研究では、統一的な政策立案・遂行を担うとされる内閣官房の公文書 (2009 年から 2018 年までの 10 年間) を対象とする。批判的な談話研究の手法を用いて、提示されている高度人材の定義、明示的あるいは暗示的に示されているその対象、表現されている受入れの目的、もしくは分析を通して読み取れる意図など、そこから見えてくる高度人材受入れ政策の内実を明らかにすることを目的とする。

研究の結果として、高度人材受入れ政策の総合的な「司令塔」が不在であり、場当たりの政策が多いことが指摘できる。加えて、明確な定義を定めないまま、高度人材という語を頻繁に使用していることが分かった。そして、受入れの目的は、技術力と多様な文化力を強化するため、生産性を向上させるため、などと公言しており、労働力確保や人手不足といった表現は使われていない。しかし一方で、就労促進文書の構成から、高度人材は女性、若者、高齢者など同一のカテゴリーに分類されており、労働力不足を補うためという意図が読み取れた。さらに、国際的な背景の強調や前提化の手段を用いて、高度人材受入れの促進に関する政策の妥当性の印象を高めようとしていることも明らかになった。

## 16:45-17:15

### 中国人日本語学習者の語用論的能力の発達 -依頼メールの外的修正の分析を通じて-

孫 雨晴 (言文 M2)

メールにも「メールらしさ」がある (太田, 2001) が、日本語教育においてはあまり重要視されてこなかった。近年、英語学習者の語用論的能力の習得を対象とした研究が行われるようになってきているが (Rose, 2000; Spyridoula, 2012 他)、中国人日本語学習者を対象とした研究は少ないのが現状であり、成功が難しいとされるメールによる依頼行為については、特に考察が不足している。

本研究は、依頼に関する語用論的能力の習得を明らかにするため、負担度が小さい場面において習熟度が異なる中国人日本語学習者が使用する依頼メールの外的修正にどのような違いがあるのかを調査した。

今回の調査では JLPT-N2 学習者 51 名、N1 学習者 53 名を含む中国人 JFL 学習者 104 名を対象にして、「授業担当教員に授業中に使った資料を送ってもらおう」という「負担度が小さい」タスクを設定し、状況説明に沿って依頼メールを書いてもらった。その後、得られた総計 104 通のメールを Economidou-Kogetsidis (2011)、Pan (2012) などに沿って設定した依頼効力を軽減、増強する、メールの展開構造に関わる三つの外的修正で分析した。

その結果、レベルが上がるにつれて外的修正の使用回数が増える傾向が見られた。N2 レベルの学習者の外的修正の使用割合が比較的高いのは「理由の提示」「談話的方向づけ」「挨拶・依頼メールの開始部」であり、「理由の提示」が最も高い割合を占めていた。N1 レベルの学習者も以上の三つを多用する傾向があり、レベルが向上しても使用傾向はあまり変わらなかった。これは先行研究が示した傾向と一致している。また、外的修正の使用種類が多様になり、単一のものを頼ることがレベルの高い学習者では少ない傾向にあった。つまり、レベルが向上するに伴って、依頼の展開構造が徐々に体系化していき、依頼の効力を軽減するストラテジーの使用が増え、使用種類も増え、依頼に関する語用論的能力を習得していくことが窺える。

**17:20-17:50**

オートエスノグラフィーの確立-勤労中高年 ASD 者への応用に向けて-

林 桂生 (独立研究者)

文化人類学批判の金字塔、ジェイムズ・クリフォードとジョージ・マーカスによる『文化を書く』(1986)では、民族誌の真実とは本質的に部分的真実であり排除とレトリックによって構築されると指摘されたが、さらに自己の弱さなど主観性を強調するのが社会学者アーサー・ボクナーとキャロリン・エリスの推奨する「オートエスノグラフィー」である。岡原正幸は『ホモ・アフェクトス 感情社会的に自己表現する』(1998)で、エリスらのオートエスノグラフィーの前段階である「感情的社会学」の「あまりにも攻撃的で積極的に感情的社会学や自己内省を推奨する」姿勢について、「研究者という立場を確保し、それに守られているからなのではなかろうか」「研究者であることが必要なのだろうか」と疑問を呈している。

文化人類学者の Deborah E. Reed-Danahay は既にその編著書 *Auto/Ethnography: Rewriting the Self and the Social* (1997) でオートエスノグラフィーは社会的コンテキスト内に自己を置くセルフナラティブであると定義しており、その書き手や題材は亡命者などのマイノリティである。やはり社会的コンテキストを意識したオートエスノグラフィーの萌芽と言えるものに、脊髄の腫瘍により 1990 年に没した人類学者ロバート・F・マーフィーの『ボディ・サイレントー病いと障害の人類学』(1987)があり、自己の感情や病いの記録だけでなく身体障害者を公私ともに取り巻く現実的な問題等の考察が様々な文献を用いて行われている。

人類学者によるオートエスノグラフィーの特色を生かせばマイノリティの苦境についての啓発に役立つと思われるが、オートエスノグラフィーと言えば感情優先のエリスとボクナーの名ばかりが挙がり、学問とは見なされてこなかった。本発表では、社会に対する問題提起を行うマーフィーに倣って、勤労中高年 ASD (自閉症スペクトラム障害) 者の困難に関する啓発の手段として学術的な裏付けと説得力あるオートエスノグラフィーを確立する必要性について考察する。

**第 3 会場 (E103 教室)****15:35-16:05**

中国のミステリー小説におけるトピック解析の試み

-雷米と鬼馬星の作品の比較考察を中心に-

コウ シンブン (言文 D1)

近年、情報処理技術の急速な進歩により、大量のデータから有益な情報を抽出することが可能になってきた。Blei (2013) により提案された LDA に基づくトピックモデルは文書集に潜在するトピックを構成する単語群を推定することができるため、推薦システム、文書分類、プロファイリングなど様々な領域で利用されている。

人文学分野におけるトピック解析の応用研究に関しては、Jockers and Mimno (2013)、田畑 (2017) などがある。Jockers and Mimno (2013) は 19 世紀のフィクション作品を大量に収集しトピック解析した結果、25 個のトピックにおいて作家のジェンダーによる相違が見られることを明らかにした。また田畑 (2017) は、トピックモデルが FLOB コーパスのサブコーパスとなっている 15 のレジスター及び下位の標本テキストに内在する意味構造をどれほど適切に抽出しうるかを検討し、コーパスの潜在意味構造を分類記述するのにトピックモデルが有効であることを示した。

テキスト解析の重要な手法としてトピックモデルは定着しつつあるが、中国語を対象とするトピックモデルの応用例はまだ限られている。そこで本発表では、中国のミステリー小説の分野において著名な作家である雷米と鬼馬星の作品を対象とし、LDA に基づくトピックモデル手法を用いて解析を行い、得られたデータをもとに比較考察を試みる。それによって、ミステリー小説創作のさいの作者による潜在的なトピック選択の違いを明らかにしたい。

分析の結果としては、両作家の間でいくつかのトピックが大きく異なっていることがわかった。雷米の作品では、目や顔、さらに体の動きに関する緻密な描写とタバコに関わるトピックが特徴的である。一方、鬼馬星の方は情報聴取と人間関係の方に重点を置いているようである。このような相違が何に起因しているのかという問題についても考えてみたい。

## 第 4 会場 (E104 教室)

16:10-16:40

1960 年代の日本映画にみる満洲イメージ

李 潤澤 (言文 D2)

日本にとって満洲とは何か。

前世紀に帝国日本の植民地支配の野心により作られた傀儡国家だというのが一般的な答えであろう。だが、それだけではない。第一に、満洲国は確かに日本の敗戦とともに崩壊したが、満洲国の実質的建設や満洲映画協会（以下「満映」と略す）を代表とする文化的建設の遺産ははっきりと目に見えるかたちで残っている。第二に、人的にも満洲国の脈は簡単に絶ち切られたわけではない。満映の場合では、一部は引き揚げて東映などの映画会社に身を置き続けて映画作品を撮ったのである。中国に残った人もいて、中国東北部の映画産業の発展に力を尽くした。第三に、表象の面から見れば、今日の映画も含め満洲は絶えず戦後日本映画のスクリーンにその影を落としている。すなわち、硝煙が消えたとしても満洲はある意味で消えず、少なくとも日本映画がそれを描き続けていることは確かなのである。

焦点を 1960 年代の日本映画界に合わせてみよう。この時代の日本映画は「第二の全盛時代」の終わりを迎え、その後「映画産業は急速な衰退を見せることになった」（四方田）と

いわれている。しかし、満洲国を舞台としたドラマ『人間の條件』三部作(小林正樹、1959-1961)が話題を呼び、満洲の日本兵たちを描いた『兵隊やくざ』(増村保造、1965)が大ヒットしてシリーズものになるなど、満洲に関する映画はむしろ活況を呈していた。本発表では、これらの映画テキストの細部までの分析と時代背景の考察とを通して、さらには戦後から1950年代にかけて製作された満洲や日中戦争に関する映画と比較しつつ、60年代の日本映画における満洲イメージについて検討する。そして、斜陽に向かう映画界にあって満洲ものが活気づいたことの背後にある社会的心理状態を観察してみたい。